素描

無口な子が話す職業に

フリーランスアナウンサー　今尾ひな子

親しい友人たちから「口から生まれたのね」とか「あなたの心臓なら大丈夫」と言われます。

否定はしませんが、実は小学校低学年の頃の私は、無口で声の小さい子供でした。その私に変化が訪れたのは5年生の時です。ある日、放送委員の選出がありました。

「あと一人誰かいないですか？」。担任の先生の問い掛けに「ひなちゃん」の声が挙がりました。すでに決まっていた千里さんと幸子さんからです。2人と一緒に活動はしたい、でも全校生徒に「皆さん、給食の時間です…」なんて、絶対むり。できないよー。モジモジする私の気持ちをよそに、拍手で決まってしまいました。

活動が始まってみると心配したほどに怖くありません。教室の発表と何が違うのでしょうか。相手の顔が見えないせいか、それとも、仲良しの2人と一緒だからか、あるいは何かが目覚めたのでしょうか。

ともあれ、マイクの前で話すことが、楽しく面白くなってしまったのです。だから、中学も高校も短大もずっと放送クラブ。気がつくと本業に。

2人に感謝の気持ちを伝えると「へえ～、そんなことあったかしら」と目を丸くしています。無意識の行為が案外、他人の人生に影響を与えているものなのですね。

あれから半世紀。近くに住む一方の友人と梅林小学校でボランティアを始めました。放送委員会のアナウンス指導です。地域住民が各自の特技を生かして児童たちとふれあう仕組みです。

なんというご縁でしょうか。めぐりめぐって母校で再び放送にかかわることほ。子供たち、先生たちに感謝です。